

知識人とモラル

盛田 常夫

総選挙を控えた1月末、ハンガリーの文化界が激震に見舞われた。オスカー賞受賞監督で、ハンガリーを代表する映画監督サボー・イシュトヴァーンが諜報部員だったというレポートが、*Élet és Irodalom*（生活と文学）誌に掲載されたのだ。個人とモラルをテーマに映画制作を続け、国際的な評価を受けてきた人物である。テレビも雑誌も、関係者の証言を詳しく扱っている。

サボー監督は「太陽の雫」（*Sunshine*）の上映で日本でも知られているし、オスカー賞を受賞した「メフィスト」や「信頼」を観た人も多いだろう。2001年制作*Taking Side*（*Szembesítés*「対峙」）は、ベルリンフィルの指揮者フルトベングラーとナチとの関わりをテーマにした密度の濃い映画である。まさに芸術家として生きることと、権力への追従との相克や矛盾を扱ったものである。そのサボー監督が諜報部員だったという事実の暴露に、多くの人が衝撃を受けた。

カーダール政権初期の暗黒時代

サボー監督が諜報部員に組織化されたのは1957年で、その任務を解除されたのが1963年。この時期は、ハンガリー動乱直後のカーダール体制確立時にあたり、権力側があらゆる手段を使って動乱参加者を検挙し、拷問を加え、処刑するか、諜報部員として組織化した特殊な時期にあたる。この歴史状況を抜きに、諜報部員という事実だけを論じることはできない。

動乱鎮圧の直後から、カーダール政権は党本部を襲撃し、本部員の殺害に手を下した動乱参加者の割り出しを始めた。動乱を扇動した者も殺人者として同罪に扱われた。この権力側からの肅正で、絞首刑に処された者は300名弱に上った。この事実だけでも人々を震え上がらせるのに十二分だった。処刑された者の関係者もまた片っ端から拘束され、暴力と恫喝によって、自白を迫られるか、権力の協力者になることを強

要された。死刑や長期拘束から逃れたいと思う者は、このどちらかを選択せざるを得なかった。

経済学者コルナイはその自伝（邦訳『コルナイ・ヤーノシュ自伝』日本評論社、2006年4月刊行予定）で、この時期のことを詳しく描いている。動乱勃発の1年半前まで、コルナイは共産党機関紙の記者だったが、機関紙編集局における党指導部への反乱活動を理由に、編集局を追放され、経済学の研究を始めていた。当時、編集局の反乱指導者の一人でコルナイの上司だったのが、ハンガリー動乱の精神的指導者として処刑されたギメシュ・ミクローシュである。コルナイは動乱勃発直後にナジ・イムレ政府の経済政策立案に参加したが、暴力的な混乱が激しくなったために、動乱から距離を置いた。他方、ギメシュは動乱を闘い抜き、鎮圧後に動乱の扇動者として手配され、1956年12月に潜伏していたコルナイの母の家を出たところを逮捕された。情け容赦ない拷問によって自白を強要され、絞首台に送られた。1989年のナジ・イムレ他の再埋葬式で祀られた英雄の一人である。

コルナイは動乱の中でギメシュに誘われて新しい新聞の発刊に加わったが、途中でそれを止めた。動乱が鎮圧された後、1957年の春からギメシュとの関係を問われ始め、連日、警察や保安局の尋問に呼び出される日々が続く。沈黙すれば拘禁される。警察の方がいろいろな情報をもっているから、単純な嘘はすぐにばれてしまう。どうやったらこの尋問から解放されるのか。もし拷問が加えられたら、どこまで耐えられるのか。毎日自問しつつ、友人たちと尋問情報を交換しながら、この苦しい時期を過ごした、とコルナイは記している。

こうした厳しい追及が緩むのは1960年代初めである。フルシチョフの平和共存路線が打ち出されたことや、カーダール政権が安定化し、対外的なイメージを刷新する必要に迫られて、拘

束していた動乱参加者を解放し始め、関係者の追求を止めた。サボー監督の諜報部員解除はこの時期にあたる。諜報部員査定による選別が行われたのだろう。有益な情報を提供できない者は、その仕事から放免された。

サボー監督の告白と反応

サボー監督が尋問を受けたのは1957年2月。演劇・映画大学の学生で、19歳の青年だった。彼自身は動乱に参加しなかったが、友人たちが武器を持った行動に参加した。3日間拘束され、諜報部員承諾書への署名なしには解放されないと脅され、それに署名した。同じように拘束されたクラスメイトも、署名して解放されたようだ。大学の学生や教員の動向を報告する義務を負った。19歳の学生にできることは限られている。高々、友人たちを権力に売る程度のものであろう。

2006年1月28日付けの*Népszabadság*紙上で、インタビューに答えたサボー監督は、動乱に小銃を持って参加した（ニュース映画に写っている）同級生のガーボル・パールを守るために、諜報部員承諾書への署名を行ったと語り、諜報部員となることで友人を守ったから、恥ずべきことはないと言った。事実、ガーボルは検挙・処刑されることはなかったが、このインタビュー記事にたいして、大学の同級生で映画監督のエレク・ユードイットがサボー監督に私信を送った。これに応えるように、その翌々日に放映されたMTVの番組の中で、サボー監督は「自らを守るために、承諾書に署名した」と前言を翻した。エレクがサボー監督に宛てた手紙には、次のように記されている。

「当時、我々はまだ十代の若者に過ぎなかった。それから50年の歴史の試練を、我々は真っ当に受けてきたのではないか。．．．君が諜報部員として誰かを傷つけたとは思わないが、友人を助けるためではなく、自らを救うために署名したのではないか」。

サボー監督はこれが正確な表現だと語り、当時、「署名しなければ厳しい状況に追い込まれ

るし、何か事実が暴露されれば、さらに窮地に追い込まれると考えた」と語った。

多くの映画関係者や文化人はサボー監督を支持しているが、最初の対応を間違ったと考えている。「若かった。怖かった。だから、承諾書に署名した。恥じている」。それだけで良かったという映画監督もいる。数年ごとに思想信条を変える人もいる時勢に、50年前の少年時代のことを非難しても無意味だというのだ。何も友人を助けるための英雄行動だったと言いつける必要がなかった。

コルナイも同意見だった。この最初の対応が間違っていただけでなく、1990年代初頭に秘密警察文書の公開が決定された時に、自ら進んで語るべきだったという。ただ、同じく諜報部員の過去を暴露されたバチカイ・タマーシュのケースとは比較できないという。バチカイは友人や家族を権力に売り、それで権力の階段を上り詰め、国立銀行総裁になった人物である。権力に迎合し、キャリアのために諜報部員としての地位を利用した人物と、一緒くたにはできない。

世論調査では、「この事件でサボー監督への評価が変わることはない」という人々が75%を占め、世論は比較的冷静に受け止めている。

ペンは剣よりも強い？

知識人とモラルというテーマは、権力と知識人との関係にかかわる普遍的なテーマだ。もっとも、権力にたいする緊張関係をもたない知識人や文化人には最初からこのような問題意識はない。カメレオンのように時流に媚びて思想信条をくるくる変えていく者にも、この種のモラル意識はないだろう。さらに、キャリアを積むために、積極的に権力に近づき、諜報の仕事を担当した者は俗物以外の何者でもなく、それを暴露されても、恥じることはないだろう。

日本では戦前の左翼弾圧に屈して、思想転向を余儀なくされたいわゆる「転向」問題が、戦後の一時期のテーマになった。天皇制国家を守るために、特別高等警察が共産主義者や左翼思想を持つ者を摘発して、拷問を加えて仲間の存

在を自供させるか、権力のスパイとして利用しようとした。小説家小林多喜二は逮捕から数時間で殴り殺された。このような野蛮な権力の暴力によって、思想転向が強制された。

「ペンは剣よりも強い」というが、これは社会の理想を記したもの。ほとんどの知識人や文化人は剣にもカネにも弱い。そうであれば、独裁権力に支配された社会には未来がない。剣やカネに強い人がいなければ、社会に光明がなくなる。だからこそ、剣にもカネにも強い人が、尊敬されるとも言える。いつの時代にも、このテーマを問うことが大切なのだ。

一般国民に責任はないか

今でこそ、日本には権力による暴力的な思想弾圧はないが、戦前の日本では天皇制軍国主義に反対する者は「非国民」として摘発され、拷問による自白と思想転向が強いられた。一般国民はそのような権力にたいして無力で、逆に「非国民」を蔑（さげす）む行動をとったり、権力の摘発に協力したりする者もいた。いつの時代にも、大衆の多くは権力に迎合することで、自らの身の安全を守ろうとする。

よく似た状況は、現在の北朝鮮に存在している。体制に刃向かう者は容赦なく弾圧される。こういう独裁国家で人々はどのように生きることができるのだろうか。多く人は沈黙を守り、権力の意に従う。そうでなければ、身を守ることができない。なかには、隣人や友人を権力に売って出世しようとする者もいる。醜いことだが、どの時代もこういう輩がいる。

北朝鮮に拉致された日本人にも、同じ問題が突きつけられたはずだ。権力側に積極的に協力して生きることを選択した人は、比較的良好な条件で生存し続けることができたが、消極的な人々は切り捨てられた。だが、北朝鮮の権力に協力して生存してきた人々を誰も非難できないだろう。彼らもまたその権力の被害者だからだ。

しかし、権力者以外は皆被害者なのだろうか。それなら、大多数の被害者がどうして少数の権力者を引き下ろせないのか。それができなけれ

ば、権力が自壊するか、外からの力で解体されるまで、独裁権力は生きながらえる。

こういう受け身的な権力崩壊を経験した国民の思考は、なかなか簡単には変わらない。体制は変わっても、古い思考が支配している。だから、アメリカは天皇制を維持しつつ、日本を統治しよう考えた。その政策は当たり、日本を属国にすることができた。他方、自らの意思で思想の転換を行えなかった日本人は、中途半端な価値観のまま戦後を生きてきた。北朝鮮の問題は、日本人にとってもけっして過去のものではない。

権力の犯罪は不問にされる

権力の暴力によって思想・信条を変えた者は批判されるが、暴力を加えた側はそれ相応の罰を受けているだろうか。一般に、権力側の組織員で拷問などの殺傷行為を行った者が、体制が変わった後に摘発され、制裁を受けることは稀である。

特別高等警察を指揮していた内務省の高官たちは公職追放処分を受けたが、拷問の実行者たちは最初から免罪されている。ハンガリーでも同じである。いつの時代にも、権力の手先として実際に手を下した末端の実行者は罪を問われることはない。どう考えても、公平でない。それどころか、日本の特高官僚はすぐに公職に戻り、再び権力の座を獲得した。アメリカの戦後日本支配はこういう非道理を許容するものだった。罪の意識が消滅するのは当然か。こうして復権した権力者の二代目たちが、今、政権政党の政治家や政府の要職に就いている。歳は若い、靖国参拝や皇室典範の改定で古い思考に凝り固まった「若年寄」が多いのは、当然すぎるほど至極当然なのだ。戦前の体制や罪を悔いることのない人々が政治を司り、国民はその言動を支持している。そのような日本人に北朝鮮の体制を嘲笑する資格があるだろうか。あれは他山の石。日本がかつて歩んだ道。今も翼賛的思考に陥りがちな日本人を見直す鏡にしたいものだ。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)